

## 「潮流・下関 2020」展の余白に

清永修全（東亜大学芸術学部教授）

今日、果たして自分たちが暮らし、働いている街の「文化空間」などというものをことさら意識したりすることがあるのだろうか。慌ただしい日々の生活に駆り立てられ、そこに否応無く埋没して暮らしているリアリティの中で、そうした想像力が働く余地など、もはや多くは残されていないのかもしれない。しかし、それでも、ふと立ち止まり、山向こうの海峡を行き交う船のかすかな警笛の音に耳を澄ますことがあるように、あるいは家路を急ぐ夜道、いつの間にか忘れていた天空の澄んだ星の瞬きにふと気づくことがあるように、時には何気なく振り返り、そこに思いを馳せることがあってもよいはずだ。意外に身近なところで、創造の息吹が芽吹き、クリエイティブな感性が息づいていることに気がつく瞬間があるかもしれない。そして、それは、おそらく自分たちが生活している街について内観的に想起することに繋がる契機を孕んでいるに違いない。今回で2回目となる下関市立美術館の展覧会「潮流・下関」は、まさにそんな機会を与えてくれる企画である。

この関門の地に居を構え、活動の拠点とし、あるいは何らかの個人的な関わりを持ちながら制作を続ける作家たちがいる。そこから集った、世代もジャンルもそれぞれに異なる三名の作家たちの競演。一見、そこにはその緩やかな枠組み以外、取り立てて共通点などないかのように見える。しかし、展示室を二周もするうちに、何かお互いに相通ずる通奏低音が作品を通じて静かに鳴り響いていることに気づく。

石山義秀氏は、フレスコという歴史的な媒体をもとに多くの群像の壁画を描いてきた画家である。今回の展覧会では、南仏のエクス・アン・プロヴァンス留学時代を中心に、油彩画やエッチングの作品が多く選び出されていた。それらの作品には、特定の個人の発するオーラや存在感ではなく、むしろ複数の人間の間において初めて生み出されたような、「個」を超えたところで醸し出される独特な佇まいや情緒が、淡く穏やかな光の中に不思議な調和をもって浮かび上がってくる。薄暗い曇が低くたれ込めるパリの空ではなく、澄み切った空気とまばゆいばかりの溢れる陽気を求めて南仏を歩き、そこに暮らしたという氏の眼差しが、その微光の中に顕現してくるかのようである。考えてみれば、フレスコによ

る壁画という表現媒体自体、歴史的にも公共性の高いジャンルであった。実際、氏はこれまでも幾多の公共建築の壁画作品を手がけてきている。人々の生活に寄り添おうとするその共感的な姿勢ゆえの「群像」というテーマ。そこには、「公共性」をめぐる関心がほの見えてくる。

順路に沿って美術館の階段を上がった最初の展示室の前に伊東丈年氏の最初の作品が姿を表す。四柱の白い角柱に半ば埋め込まれているかのように浮き上がる人の手の一部と顔。しかし、どの顔にも苦痛の跡などなく、むしろ静かに瞑想しつつ浸っているようにも見える。彫刻は、それが置かれる周囲の空間の知覚や捉え方に働きかけ、ひいてはその空間さらにはその「場」との関わり方自体にすら影響を与えるユニークな側面を持った芸術ジャンルである。ここでも展示室前の空間がこれまでに見たことのない新たな表情を獲得し、見る者の身体感覚に働きかけていた。一方で、これまで大分や下関を中心に様々な「公共彫刻」に従事してきた伊東氏である。本来、時間の静止した芸術としての彫刻。しかし、そんな彫刻作品によって氏は「時」を紡ぐべく新たな世界を探求しているという。関門の「都市空間」にその作品を通してどんな関わり方を提起しようとしているのかが気になり始めた。

本来デッサンとは他人に見せるものではなく、それだけにどこか素顔を人前に晒しているような気分になると語るのは、中原麻貴氏である。とりわけその初期のスケッチ作品について尽きない魅力を感じるのは、何気ない建物や場所に宿る、かつてそこに住んでいた人々の生活の「痕跡」を表現しようという、そのコンセプトである。それゆえ、それらの作品に人物が登場することはない。しかし、むしろそのことで「痕跡」が一層際立ってくる。その「痕跡」が静かに語り始める。「かつてそこにあり、今は失われてしまったもの」に対する憧憬という意味では、かつてのロマン主義芸術のアプローチへの親近性を感じさせる。しかしながら、あくまで庶民の生活が一貫してテーマになっているところに、そのスタンスの独自性を感じる。しかも、それらを、単なるノスタルジーでもなく、また決して妙な無常感を醸し出すこともなく顕現させようとしている。そこには庶民の日々の生活に対する氏の尽きない関心と肯定感を感じてやまない。氏の作品が、一個人の追憶を超えた「共同性」に働きかけてくる所以である。中原氏は、数年前からその制作活動の場を京都から下関に移している。この下関の街には、今描き取っておかなければ永遠に失われてしまうかもしれない愛おしむべき「痕跡」がそこかしかに溢れているのだという。

展示室を後にしたときに感じる余韻がある。それによって、ここで展開している世界が、実は私たちの日常世界とそのまま地続きになっていることに気づかされる。アートの問題を、ともすれば「中央」と「地方」、「世界」と「日本」といったお決まりの尺度や極で測って事足れりとするのではなく、自分たちが暮らし働く街の絶えざる文化の息遣いとして受け止め、パブリックなエートスとでも言うべきものを育む場として考える機会を与えてくれる展覧会。「潮流・下関 2020」展は、そんな企画だったのではないだろうか。

さて、その意味でも、12月19日に「潮流・下関 2020」展関連企画として下関市立美術館講堂で開催された講演会、金田晋氏（東亜大学特任教授・広島大学名誉教授）による「美と公共性—公立美術館を考える—」は、まさに本展覧会の通奏低音を別の角度から拾い上げ、深める機会を与えてくれたように思われる。それは、多年に亘り、美学者、とりわけ本邦を代表する「現象学的美学」の論者として、そしてまた広島県を中心に美術館政策や芸術文化行政に携わり、尽力されてこられた氏の経験を踏まえてなされた啓発に満ちた講演であった。

そこではまず、戦後日本の復興期から現在に至る歴史を背景に、各地に地方公立美術館が誕生するタイミングが確認され、その歴史性が明らかにされる。わけでも東広島市立美術館の草創期のエピソードは、そうした黎明期の試行錯誤の営みの一端を語って余りあるものがあった。「情熱」と「勤勉」と「人脈」こそが地方公立美術館の成功の鍵であると語られていたのが印象的であった。ついで、戦後広島における美術運動の展開が、芸術家たちによる創造の営みはもちろんのこと、何よりそれを取り囲み、支えた人々との、時には生臭くさえある生き生きとした交流を通して振り返られることになる。ここで、その珠玉の例として引き合いに出されていたのが、かつて広島の飲屋街にあり、後に画廊となる居酒屋「梟」を中心に織り成された交流のエピソードである。さらに、そうした出来事が起こっていた背後で、同じ時代に展開していた「公共性」をめぐる哲学や美学上の論争にも話が及ぶ。そこでは、「公共性」の問題が、私的な領域と国家的な領域の間に生まれる「第三の領域」として、何より市民精神の体现の場として意識されていたことが指摘される。実は、「梟画廊」を舞台に、イデオロギーを超えて展開された芸術をめぐる闊達な論争の歴史こそは、この市民による「公共性」の精神の具現化に他ならなかったというわけである。広島における一連の公立美術館のあゆみは、まさにこうした市民精神とともにあったと氏は語ろうと

しているかのようにであった。

講演後の質疑応答の場面に及んで、上記の議論はさらに深みを増す。「地域に根を持つ」地方公立美術館は、芸術作品を前に、その受け止め方や見方、感じ方の違いを前提としつつ、芸術をめぐって「答えのない議論をする」場所でなければならない、延いては「言葉を鍛え、育て上げる場所」となければならないと金田氏は力説する。それが可能となって初めて、地方公立美術館はパブリックな美意識を育むフォーラムとなり、市民生活の中にその確たる場を得ることになる。その本来の課題を全うするにふさわしい場所となるのである。こうした議論を通して、氏は、地方公立美術館を、地域社会に根付きつつ、その市民的なエートを活性化させる、終わりなき対話と議論の舞台として、いわば 21 世紀の「アゴラ」として捉え直すことを提言しようとしていたように思われた。

「潮流・下関 2020」展と金田氏の記念講演、この二つを通して、その彼方に本市立美術館がこれから歩むべき道も仄見えた気がした。